

## 「は」と「が」の新しい捉え方についての一考察

—「は」と「が」はこんなに簡単だった!—<sup>1</sup>

庵 功雄

### 要旨

本稿では、「は」と「が」の用法を整理した上で、日本語教育文法（産出のための文法）の立場からした「は」と「が」の使い分けに関する新しいフローチャートを提示する。このフローチャートに含まれる要素は極めて限られており、かつ、それらは母語の特性によらない。このことから、「は」と「が」の使い分けは（適切に指導すれば）どの言語の話者にとっても簡単なものであると言える。

キーワード：「は」と「が」、産出のための文法、母語の知識を活かした日本語教育、文らしさ、判断形式

### 1. はじめに

助詞「は」と「が」の違いは日本語統語論の根幹に関わるものとして、様々に議論されてきた。一方、日本語教育の観点からは「は」と「が」の使い分けは次のように見なされていると思われる。

(1) a. 「は」と「が」は難しい

b. 「は」と「が」は韓国語話者以外には使いこなせない

本稿は、「は」と「が」に関する議論を整理した上で、庵（2016）を修正した「は」と「が」の使い分けに関する新しいフローチャートを提示し、(1) が誤りであることを示すことを目的とする。

### 2. 考察対象

本節では、「は」と「が」が使われる構文環境を概観し、本稿の考察対象を限定する。

#### 2.1 「は」が使われる環境

「は」は次のような環境で用いられる。

##### 1) 格成分のあと

「は」は格成分のあとにつけられる。

(2) 太郎はこの本を書いた。(ガ格)

(3) この本は太郎が書いた。(ヲ格)

(4) 次郎には太郎がその本をあげた。(ニ格)

(5) 花子からは昨日連絡があった。(カラ格)

(6) その問題については私が説明します。(複合格助詞)

##### 2) 接続助詞のあと

「は」は一部の接続助詞の後にもつけられる。

(7) 私が家に帰ったときは彼女はもう家にいなかった。

(8) 3月に日本に帰ってからは一度も外国に行っていない。

##### 3) 述語の中

「は」は述語の中でも使われる。

<sup>1</sup> 本稿は Iori (2017b) の内容を加筆・修正したものである。

(9) 私はその手紙をまだ読んではいない。(動詞)<sup>2</sup>

(10) 彼の話は面白くはない。(イ形容詞)

このうち、本稿で取り上げる「が」の使い分けが問題になるのは、(2) のような主格名詞句に「は」がつく場合である。

## 2.2 「が」が使われる環境

「が」は次のような環境で使われる。

### 1) 動作、出来事、状態、存在の主体、感情の持ち主

「が」は動作、出来事、状態、存在の主体、感情の持ち主を表すのに使われる。

#### a) 述語が動詞の場合

(11) ネコがネズミを追いかけている。(動作の主体)

(12) 火山が噴火した。(出来事の主体)

(13) 窓ガラスが割れている。(状態の主体)

(14) 机の上に本がある。(存在の主体)

(15) 太郎が怒った。(感情の持ち主)

#### b) 述語が動詞以外の場合<sup>3</sup>

(16) この本が面白い。

(17) それが結論だ。

### 2) 感情、生理現象の対象

「が」は感情や生理現象の対象を表すこともある。

(18) 太郎は花子が好きだ/嫌いだ。

(19) (私は) 頭が痛い。

### 3) 項の増減をとみなわないボイス表現

「が」は次のような項の増減をとみなわないボイス表現でも使われる。

(20) (私には) この本が読みやすい/読みにくい。(難易文)<sup>4</sup>

(21) 太郎はフランス語が話せる。(可能文)

### 4) 「ハーガ構文」の「が」名詞句

日本語には「ハーガ構文」と呼ばれる構文がある<sup>5</sup>。「が」はこの構文でも使われる。

(22) 象は鼻が長い。(タイプA)

(23) この町は駅前が賑やかだ。(タイプB)

<sup>2</sup> 「は」が動詞またはイ形容詞につくと、必ず久野 (1973) の言う「対比」の意味になる。例えば、(9) が単純否定を表すのに対し、(9) は対比を表し、[ ]の中のような含意を持つ。

(9') 私はその手紙をまだ読んでいない。

(9) 私はその手紙をまだ読んではいない。[しかし、その内容は大体わかる。]

<sup>3</sup> この場合の「が」は久野 (1973) の言う「総記」になる (後述)。

<sup>4</sup> これらの文では「難易」や「可能」などの接辞がつかない文と比べて、項の増減がない。

(20') 私はこの本を読む。

(21') 太郎はフランス語を話す。

一方、受身や使役の場合は項の増減がある。

(a) 新製品が発売された。(←X社が新製品を発売した。)(項が1つ減)(受身)

(b) 太郎は次郎を買い物に行かせた。(←次郎が買い物に行った。)(項が1つ増)(使役)

<sup>5</sup> (3) のように対格名詞句が主題化した場合および (18) ~ (21) のような場合は、通常「ハーガ構文」には含めない。この構文について詳しくは、三上 (1960)、菊地 (1990)、野田 (1996) などを参照。

この構文は大きく2つのタイプに分かれるが、いずれも述語は動詞以外（通常は形容詞）である。タイプAは、「XはYがZ（だ）」の構造で、「XはZ（だ）」が非文法的になるものである。例えば、(22')は非文法的である。

(22') \*象は長い。

これは、タイプAでは「YがZ（だ）」が1つの述語を形成していることを示している。

一方、タイプBは、「XはYがZ（だ）」の構造で、「XはZ（だ）」が非文法的にならないものである。例えば、(23')は文法的である。

(23') ok この町は賑やかだ。

これは、タイプBでは「Yが」が「XはZ（だ）」の内容を詳しくしていることを示している。高橋（1977）が「Y」を側面語と呼ぶこの「Yが」は文の必須成分ではない。

以上の1)～4)の「が」名詞句のうち、2)3)は次節で言う「主語」と言うよりも「目的語」である。また、4)のタイプAにおける「Yが」は述語の一部であり、タイプBのそれは文の必須成分ではない。したがって、4)も「主語」とは言いがたい。以上のことから、本稿で取り上げる「は」と対立する「が」は1)だけである。

### 3. 「主語」と「主題」

「は」と「が」に違いを考える上で、重要なのが「主語」と「主題」という概念である。

#### 3.1 三上章の主語廃止論と「主語」「主題」

日本語研究の歴史上、「は」と「が」の問題を考える上で外せないのが三上章の存在である。

三上は、「は」と「が」をともに「主語」とする当時主流の主張に反対し、日本語には英語などのヨーロッパ言語の「主語」と同じ意味の「主語」は存在しないという「主語廃止論」を展開した。

三上の主語廃止論は、文字通りに、「日本語」に「主語」（後述の用語で言う「文法的主語」）が存在しないという主張だと解釈すると、その主張は誤りであるという指摘が有力である（原田 1973、柴谷 1985）。しかし、三上の著作を注意して読むと、三上の真意は、「主語」という概念の廃止にあると言うよりも、「は」と「が」に別の名称を付与すべきだという点にあることがわかる。三上の主張をこのように解釈すると、三上の主語廃止論は基本的に間違っていないと考えられる。少なくとも、三上の主張が「は」と「が」の研究を大きく進めたことは間違いない事実である（庵 2003）。

三上は、「主題」と「主語」を次のように定義している（三上 1960, 1963）。

まず、「主題」は、文頭にあって、「～について言えば」という意味を表すものであり、その文が述べる内容について聞き手／読み手に知らせる機能を持っている。

一方、「主語」はヨーロッパ言語に見られるような述語との一致を引き起こすものを言う。三上は、一致のような現象を「主格名詞句が統語的に特権的な振る舞いをする」ことととらえ、そうした「特権的な主格名詞句」を「主語」と呼ぶべきであり、そうした意味の主語は日本語には存在しないとした。前述のように、この見方については、原田、柴谷らの有力な反論があるが、三上の真意は、「は」と「が」に別のラベルを貼るべきだということにあり、「主語廃止」はそのことを受け入れさせるための方便（strategy）と考えられる。

三上の「主語廃止論」をこのように解釈すれば、三上の主張は本稿の考え方と極めて整合的である（cf. 庵 2003, 2012）。

#### 3.2 2つ（3つ）の「主語」

三上（1960:付録2）は論理学における「主語」の扱い方を批判している。例えば、論理学では、

(24) は (26) と解釈されるが、それは誤りであり、(24) は (25) と解釈すべきであり、(25) の「私の兄」「手紙」は “recevoir (receive)” の項に過ぎないと主張している。

(24) Mon frère reçoit une lettre. (“My brother receives a letter.”)

(25) (Mon frère) reçoit (une lettre).

(26) (Mon frère) (est recevant une lettre). (“(Lit.) My brother is a receiver of a letter.”)

前述のように、三上は「は」でマークされる名詞句を主題と呼んでいるが、論理的主語 (subject in logic) は「主題」と呼ぶべきもので、主語と呼ぶべきではなく、一致などの統語現象から定義される主語 (文法的主語) を「主語」と呼ぶべきであるとしている (その上で、そうした「主語」は日本語には存在しないと主張している)。

このように、「主語」という語は西洋語の伝統では不明確に使われてきたと言え、「は」と「が」の違いを理解するためには、三上が主張するように、少なくとも、「主題」(論理的主語) と「主語」(文法的主語) を区別する必要がある<sup>6</sup>。

### 3.3 無題化と「は」と「が」

以上の議論を受けて、本稿では「主題」と「主語」を区別し、「は」が表すものを「主題」とし、2.2 の 1) の「が」が表すものを「主語」と考えることとする。

その上で、次の例を考えてみよう。

(27) 昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだそうだよ。

(27) は第一発話では非文法的になり、(28B) のような疑問文を誘発する<sup>7</sup>。

(28) A: 昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだそうだよ。

B: えっ、誰が?

これは、(28A) では「飲む」がとる格枠組み<ガ (動作主)、ヲ (対象)>のうち、「ガ格」が特定されず、「述語がとる格枠組みに含まれる要素はその文中で、照応その他の手段によって全て特定されなければならない」という「格枠組みの原理」に違反するためである (cf. 寺村 1982, 庵 2012)。

一方、(29) には (28A) と同じく、ガ格名詞句が現れていないにもかかわらず、この文は第一発話で使われても文法的である。

(29) 太郎は昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだそうだよ。

これは、三上が「無題化 (コト化)」と呼ぶ次の統語的操作を考えると説明できる。三上は、(29) のような主題を持つ文 (有題文) の命題部分を取り出すため、その部分を (形式) 名詞「こと」に前接させる統語操作を考案し、これを「コト化」と呼んだ (三上 1960) <sup>8</sup>。

(30) [太郎が昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだ]ことは事実だ。

(30) のコト化部分と (29) からモダリティ部分を削除した部分を比べると次のようになる<sup>9</sup>。

(31) a. 太郎は昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだ。 (cf. (29))

<sup>6</sup> この点は柴谷 (1985) も三上と同様の立場をとっている。なお、「主語」にはこれ以外に、直接受動文における「対応する能動文の主語」を指す「論理的主語 (logical subject)」という用語法もある (Lyons 1968)。「論理的主語」は「動作主」に当たる (角田 2009) が、本稿ではこれも「主語」とは考えない。  
<sup>7</sup> ここでは、「第一発話」という条件が重要である。日本語はいわゆる「pro-drop 言語」(文脈内で回復可能 (retrievable) な名詞句は顕現しなくてもよい言語) であるため、次のように、先行文脈で「太郎」が言及されている場合には (28) は文法的になる。

(c) さっき、太郎と話したんだけど、昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだそうだよ。

<sup>8</sup> 三上は命題部分を「コト」、モダリティ部分を「ムード」と呼んでいる。

<sup>9</sup> 「そうだ」「よ」は対事的モダリティ、対人的モダリティを表す (仁田 1991) ので、命題には入らない。

b. 太郎が昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだ (こと) (cf. (30))

(31a) と (30) を比べてみよう。

(31a) 太郎は昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだ。 (cf. (30))

(30) 太郎が昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだことは事実だ。

すると、(31a) では「太郎」が主題であるの対し、(30) では「太郎が昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだこと」全体が主題になり、「太郎」はその一部に格下げ (rankshift. Cf. Halliday 1994) されていることがわかる (つまり、「コト化」は主題を奪う「無題化」である)。このことから、(31a) で主題である「太郎」は、主題を奪われると、(30) のように「太郎が」となることがわかる。そして、(31a) の命題部分を表す (31b) では格枠組みの原理が満たされているため、(29) は文法的なのである。また、(31a) と (31b) の「太郎」の部分の対応関係から、(31a) の「太郎は」は (31b) の「太郎が」 (つまり、主語) が主題化したものであると言える。

同様に、(32a) はヲ格名詞句である「太郎を」が主題化したものである。

(32) a. この本は太郎が書いた。 (= (3))

b. この本を太郎が書いた (こと)

このように、主格または対格の名詞句が主題化すると、主格、対格のマーカが脱落する。このことを三上は、「は」は「が」「を」を兼務すると表現した。

一方、主格、対格以外の格成分が主題化した場合は、「は」は脱落しない ((33) (34))<sup>10</sup>。

(33) a. 次郎には (??は) 太郎がその本をあげた。 (= (4))

b. 次郎に太郎がその本をあげた (こと)

(34) a. 花子からは (??は) 昨日連絡があった。 (= (5))

b. 花子から昨日連絡があった (こと)

このことから、一般に次のようになる。

(35) a. X-CPはY。 (CP : 格助詞)

b. X-CPY (こと)

ただし、CP = 「が、を」のときは (35a) の CP は削除される

すなわち、「は」は格助詞と統合的關係にあり、格助詞とは異なる統語的性質を持つ。国語学では「は」は係助詞、日本語学では取り立て助詞と呼ばれるが、「が」が主語と表す場合の「は」と「が」の最も重要な違いは、「が」が命題レベルに属する助詞であるの対し、「は」が主題という情報伝達レベルに属する助詞であるという点である<sup>11</sup>。

#### 4. 「は」と「が」の使い分けに関わる要因

本稿では、「は」と「が」の使い分けに関して庵 (2016) の提案を一部修正した次のようなフローチャートを提案する<sup>12, 13</sup>。

<sup>10</sup> そのため、例えば次例は preferred な読みでは「安保の年が (いつであるかが) わからない」となる。

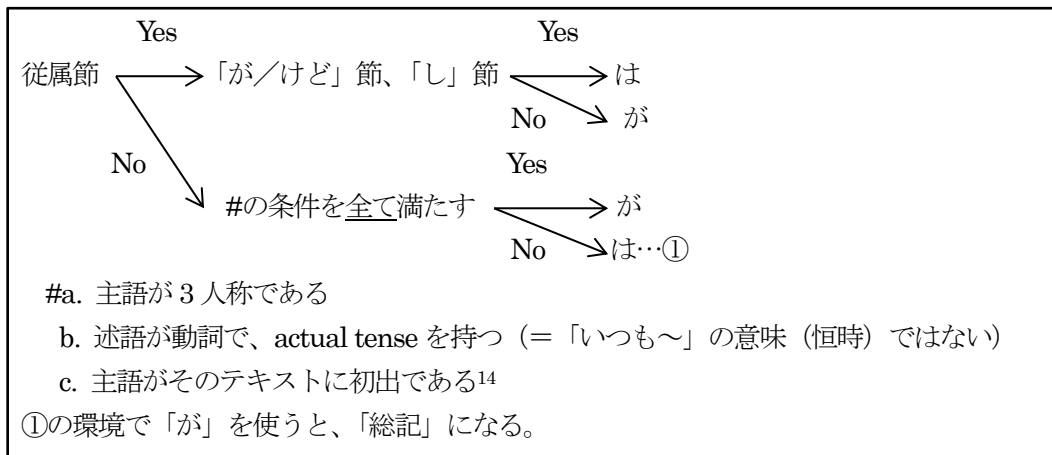
(d) 安保の年はわからぬくせに 人並にデモったりして (さだまさし「昔物語」)

したがって、文法的には、ここで意図されている「安保の年にデモをした」の意味にするためには「安保の年には」とする必要がある。

<sup>11</sup> 「は」と「が」の違いは、Halliday の三層構造から言うと、「は」は Textual metafunction、「が」は Ideational metafunction に属するということになる (cf. 庵 2012, Halliday 1994)。

<sup>12</sup> このフローチャートは、日本語教育文法の立場から「産出のための文法」(庵 2015, 2016) のために作られている。庵 (2015, 2016) では「(規則のカバー率) 100% 目指さない文法」の重要性を説いてお

図1 「は」と「が」の使い分け



以上をまとめると、次のようになる。

- (36) a. 「が/けど」節と「し」節では「は」、それ以外の従属節(名詞修飾節を含む)では「が」を使う
- b. 単文(および主節)では、図1の#の3つの条件が満たされる場合のみ「が」、それ以外の場合は「は」を使う。この場合「が」は中立叙述(久野1973)と解釈される
- c. 単文(および主節)で、(36b)から「は」を使うべきところで「が」を使うとその「が」は総記と解釈される

#### 4.1 主節か従属節か

まず、(36a)に関わるのは、従属節か否かということである。なお、(37)のように主節と従属節の主語が同じ場合は、主節/単文の場合と同様に考えることができる。

(37) 太郎は部屋に入って、明かりをつけた。

したがって、ここで言う「従属節」というのは、(38)(39)のように「従属節の主語が主節の主語と異なる場合」のことである。

(38) 雨が降ってきたので、私は急いで家に帰った。

(39) 雨は降ってきたが、風は強くなかった。

従属節の場合、通常は(38)のように「が」が使われる。ただし、南(1974, 1993)の階層構造モデルで言うC類従属節の「が/けど」節と「し」節の中では通常「は」が使われる<sup>15</sup>。

#### 4.2 現象文か否か

次は、主節/単文の場合である。この場合は(36b)にあるように、次の3つの条件を満たす場

り、このフローチャートも、原理的にカバー率100%にはならず、例外的な場合が存在する。また、このフローチャートで選ばれる形式は「それを使った例が非文法的になることはない」ことを示す。

<sup>13</sup> 「は」と「が」の振る舞いに関しては、複文の従属節であるか否かが問題になるので、複文の主節と単文は同様に考えてよい。

<sup>14</sup> Iori (2017b) では、a~cに加えて、「話し手が現場で知覚した現象や何らかの情報源を通して得た情報を述べる」を立てた。これは、(29)のような文が第一発話で使われる可能性があるためである。

(29) 太郎は昨日、喫茶店でコーヒーを飲んだそうだよ。

しかし、実際はこうした文は通常、「太郎」が話題に上っていない場合には語用論的な理由から回避されると考えられるため、本稿ではこの条件を削除することとした。

<sup>15</sup> 南のモデルを含む、日本語研究における階層構造に関する議論についてはIori (2017a) を参照。

合のみ「が」が使われ、それ以外の場合は「は」が使われる。

- (40) a. 主語が3人称である
- b. 述語が動詞で、actual tense を持つ肯定形である<sup>16</sup>
- c. 主語がそのテキストに初出である

ただし、注意する必要があるのは、ここで問題としているのは、「強調しない」中立的な解釈の場合であるということである。言い換えると、次のようになる。

- (41) a. (40a) ~ (40c) を全て満たす「が」は中立叙述 (久野 1973) になる
- b. (36b) から「は」が使われるところで「が」を使うと、その「が」は総記になる

例えば、(36b) から、主語が1人称の場合、単文で「が」を使うと、必ず総記になる。

- (42) 私がその会議に出席します。(総記の解釈のみ ok)

ここで、主節/単文の場合に中立叙述の「が」が使われるのは、仁田 (1991) などの言う現象描写文の場合に限られる。現象描写文は、「話し手の視覚や聴覚等を通して捉えられたある時空の元に存在する現象を、(中略) 主観の加工を加えないで言語表現化して、述べた」ものであり、また、「新たに現象を言語表現の場に導入する」ために用いられる文でもある (仁田 1991:36)。

なお、現象描写文は通常肯定文に限られる。それは、否定文は通常何らかの前提を持つためである (寺村 1979)。例えば、(43) が第一発話で自然に使えるのに対し、(44) は「雨が降っていると思っていたのに、外に出てみたら雨が降っていなかった」という特別な状況でしか使えない。

- (43) 雨は降っていない。
- (44) あれっ、雨が降っていない。

#### 4.3 主語を強調するか否か—母語の知識を活かした日本語教育—

次に、(36c) についてである。(36b) から「は」が使われる環境で「が」を使うとそれは総記と解釈されるが、5.3 で見るように、これは、この場合三上 (1953) の言う指定文になるためである。言い換えると、この「が」は「主語を強調する」ために使われる。実は、「は」と「が」に関する誤用の中で、聞き手の心証を害しやすいのが (36b) の環境で不適切に (すなわち、主語を強調する必要がない文脈で) 「が」を使う誤用である。したがって、日本語教育では (36c) のような主語を強調する場合を適切に使えるようにすることが必要となる。

これに関しては、庵 (2016) でも述べたように、母語の知識を活かす方策をとることが望ましい。つまり、学習者の母語で「主語を強調する」ことが適切である場合に限り、日本語で「主語を強調する」のが適切になると指導するのである。そうすれば、同一の話題において何度も (36c) タイプの「が」が現れるようなことはなくなるはずである。

なお、(45) のような疑問語が主語である場合、および、それに対する答えの文では (36c) タイプの「が」が使われる (cf. 庵 2013) が、これは導入の際に別扱いした方がよいと考えられる<sup>17</sup>。

- (45) A: 誰がこのコップを割ったんですか?
- B: 太郎が割ったんです。

<sup>16</sup> 次のような potential 用法では、文が益岡 (1987) の「属性叙述文」になるため、「は」が使われる。  
(e) 太郎は毎朝6時に起きている。

<sup>17</sup> 普通形が未導入の段階では (45A) は使えないため、教室活動では通常 (f) が使われる。しかし、この形(「のだ」なし疑問文)を学習者に発話させることは誤った形のインプットを与えることになるため、普通形が導入されるまでの段階では、可能なら (f) は教師のみが発話するようにすることが望ましい。

(f) 誰がこのコップを割りましたか?

## 5. 「は」と「が」の違いが意味するもの

本節では、前節で見た「は」と「が」の使い分けに関する現象が意味することについて考える。

### 5.1 文らしさ

最初の観点は「文らしさ (sentencehood)」である。

(36a) で、従属節では基本的に「が」が使われることを見た。言い換えると、従属節は基本的には独自の主題を取れないということである。例えば、次のようである。

(46) 雨が降っているのに、太郎は出かけた。

(47) ??雨は降っているのに、太郎は出かけた。

ここに見られる「は」と「が」の違いは「文らしさ」の違いとしてとらえられる。すなわち、「が」は「は」に比べて「文らしさ」が落ちることである。

これは、南 (1974, 1993) の階層構造モデルとも整合的である<sup>18</sup>。

南は、従属節の中に含まれる文法カテゴリーという観点から、従属節を次の4種類に分類した。

(48) A類: ガ格以外の補語、ボイス (E.g. ながら)

B類: A類に含まれる要素、ガ格、アスペクト、肯否、テンス (E.g. のに)

C類: B類に含まれる要素、は、だろう (E.g. けど)

D類: C類に含まれる要素、対人的モダリティ (と (直接引用))

この南の階層構造モデルは、田窪 (1987)、益岡 (1997)、野田 (2002) などによって発展させられた形で、現在の日本語統語論の前提となっている (Iori 2017a)。

### 5.2 判断形式の違い

次に、(36b) で問題になるのは判断形式の違いである。

Kuroda (1972) は、言語には2つの判断形式、すなわち、事象的判断 (thetic judgement) と範疇的判断 (categorical judgement) が存在し、それぞれが日本語では「(中立叙述の) が」と「は」で表されることを指摘している (両者の関係については井川 2012 が詳しい)。

例えば、Kuroda によれば、(49) は事象的判断として、犬が走っているという事情を全体的に把握し、それに判断を加えずに表現しており、それに対応して、(49) には主語 (厳密には、「論理学的主語」すなわち主題) は存在しない。

(49) 犬が走っている。

これに対し、(50) は範疇的判断として、「犬」という対象とそれに関する判断を表しており、それに対応して、(50) には「論理学的主語」(すなわち主題) が存在するとしている。

(50) 犬は走る。

Kuroda の言うこうした判断の2類型という見方は、尾上 (1973) の「文核」と「結文の枠」(および、尾上 (1981) における「は」の「二分結合」性)、益岡 (1987) の「事象叙述」と「属性叙述」<sup>19</sup>、仁田 (1991) の「現象描写文」と「判断文」といった見方に基本的に対応すると見られる。

### 5.3 指定と措定

最後に、(36c) で問題になるのは、コピュラ文の2タイプである。

三上 (1953) は、名詞文に措定文と指定文という2つのタイプがあることを指摘している。例え

<sup>18</sup> 「南モデル」の解釈については、南自身が「文らしさ」を表していると主張している場合もある (南 1993) が、そうした解釈は妥当ではないことが尾上 (2016) において説得的に述べられている。

<sup>19</sup> 益岡 (1987) は事象叙述文では「主語」(すなわち「文法的な主語」) が存在しないのに対し、属性叙述文には「主語」が存在するとしている (Kuroda は事象的判断においても「主語」は存在するとしている)。



ば、(51)は「太郎」の属性を述べる指定文であり、「大学生」は非指示的である。一方、(52)は「太郎」と「その大学生」が同一物であることを表す指定文であり、「その大学生」は指示的である。そして、それに対応して、(53)は非文法的であるの対し、(54)は文法的である<sup>20</sup>。

- (51) 太郎は大学生だ。(Taro is a student.)  
 (52) 太郎はその大学生だ。(Taro is the student.)  
 (53) \*大学生が太郎だ。(\*A student is Taro.)  
 (54) その大学生が太郎だ。(OK The student is Taro.)

さて、(55)では図1より「私が」が総記と解釈される。

- (55) 私がその会議に出席します。(= (42))

これを上記の指定文の議論に当てはめると、(55)は(56)と等価であると言える(野田1996)。

- (56) その会議に出席するのは私です。

これに対し、(57)のように図1から「が」が中立叙述になる場合は、事象的判断を表す(すなわち、出来事を全体として認識している)ため、(58)には置き換えられない((58)に置き換えられるのは「雨が」にプロミネンスが置かれて「雪」などと対比される場合である)。

- (57) 雨が降っている。  
 (58) #降っているのは雨だ。

## 6. おわりに

本稿では、「は」と「が」の使い分けに関する議論を整理した上で、「は」と「が」の使い分けのフローチャートとして図1を提案した。図1に関わる要因は、従属節か否かおよび形態論的知識(図1の#の条件を満たすか否か)だけであり、そこには、母語に「は」と「が」に相当する形式が存在するか否かは関わっていない。したがって、(1)は誤りであると言える。

- (1) a. 「は」と「が」は「は」と「が」は難しい  
 b. 「は」と「が」は韓国語話者以外には使いこなせない

Kuroda (1972)の議論が言語普遍性を意図していると思われることからわかるように、判断の2類型に基本的に対応する「は」と「が」という形式を持つ日本語はこの分野において重要な貢献を行っていると考えられる(cf. 益岡1987、井川2012)。

今後の課題の1つとしては、庵(2018)で述べたような形で、自然言語処理との関連から図1を修正し、より精度の高いものにしていくことが挙げられる。

## 参考文献

- 庵 功雄 (2003) 『『象は鼻が長い』入門』くろしお出版  
 庵 功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 (第2版)』スリーエーネットワーク  
 庵 功雄 (2013) 「『のだ』の教え方に関する一試案」『言語文化』50、pp.3-15、一橋大学  
 庵 功雄 (2015) 「『産出のための文法』に関する一考察—「100%を目指さない文法」再考—」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』pp.19-32、くろしお出版  
 庵 功雄 (2016) 「『産出のための文法』から見た「は」と「が」」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』pp.289-306、くろしお出版

<sup>20</sup> この議論は( )内の英語でも並行的に成り立つことに注意されたい。詳しくは西山(2003)参照。

- 庵 功雄 (2018) 「日本語教育文法から見た「は」と「が」『シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア」』予稿集、国立国語研究所
- 井川壽子 (2012) 『イベント意味論と日英語の構文』くろしお出版
- 尾上圭介 (1973) 「文核と結文の枠」『言語研究』63、pp. 1-26
- 尾上圭介 (1981) 「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』58-5
- 尾上圭介 (2016) 「書評 林四郎著『基本文型の研究』(復刊)」『日本語文法』16-1、pp.120-129
- 菊地康人 (1990) 「「XのYがZ」に対応する「XはYがZ」文の成立条件」『文法と意味の間』pp.105-132、くろしお出版
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 柴谷方良 (1985) 「主語プロトタイプ論」『日本語学』4-10
- 高橋太郎 (1977) 「文中に現れたる所属関係の種々相」『国語学』103
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 (改訂版)』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1979) 「ムードの形式と否定」寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 I』に再録、pp.43-73、くろしお出版
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書1 「は」と「が」』くろしお出版
- 野田尚史 (2002) 「1 単文・複文とテキスト」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法4 複文と談話』pp.3-62、岩波書店
- 原田信一 (1973) 「構文と意味」『言語』2-2
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版から再版 (1972)
- 三上 章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 三上 章 (1963) 『日本語の論理』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- Halliday, M.A.K. (1994) *An introduction to functional grammar* (2<sup>nd</sup> Edition). Edward Arnold.
- Iori, Isao (2017a) “5 The layered structure of the sentence”, Shibatani, M., Miyagawa, S. and Noda, H. (eds.) *Handbook of Japanese Syntax*. pp.-, De Gruyter Mouton.
- Iori, Isao (2017b) “A brief survey of functional differences between the “topic” marker *wa* and the “subject” marker *ga* in modern Japanese”, *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*. 58-1, pp. 15-32, 一橋大学
- Kuroda, S.-Y. (1972) “The categorial and the thetic judgement”, *Foundations of Language*. 9-2, pp.153-185.
- Lyons, John (1968) *Semantics* 2. Cambridge University Press.